

創作・万葉能

「水城の別れ」

～大伴旅人と娘子児島の物語～

シテ▷ 大伴旅人

ワキ▷ 大伴百代

ワキ▷ 遊女児島

大宰帥大伴卿の大納言に兼任して、京に向かひて上道す。此の日馬を水城に駐めて府家を顧み望む。時に卿を送る府吏の中に、遊行女婦あり。その字を児島といふ。ここに娘子、此の別るることの易きを痛み、彼の会ふことの難ききを嘆き、涕を拭ひて、みづから袖を振る歌を吟へり。

帥として長らく滞在した九州の大宰府より、
大納言として昇進、奈良の都へ戻ることとなった大伴旅人。
旅立ちの朝、旅人の従人である大伴百代は見送りを申し出た。
水城へと馬を歩ませる二人。

百代 「旅人様、この度のご昇進、誠におめでたいことでございます。」

旅人 「めでたいことなどあろうものか。
都へ戻ったところで、この大宰府の地で妻を亡くした私に、
何が残ろう・・・」

～還るべく時は成りけり京師にて誰が手本をかわが枕かむ～
～愛しき人の纏きてし敷栲のわが手枕を纏く人あらめや～
～京なる荒れたる家にひとり寝ば旅に益りて苦しかるべし～

せめて明るく見送ろうと、話題を向ける百代。

百代 「いろいろございましたね。」

旅人 「ああ、いろいろと。」

百代 「いつぞやの梅花の宴、覚えておられますか。」

旅人 「ああ、実に素晴らしい夜であった」

百代 「ええ誠に。旅人様は、良きお仲間にもまれて本当にお幸せな方にございます。
．．．．．そして、良きお方にも。

～ぬばたまのその夜の梅をた忘れて折らずに来にけり思ひしものを～

あの宴の夜。
咲き誇る満開の梅のなか、ひとり佇む女性に
私は、恋をしました。

その方がひとたび舞えば、周りのものの心があたたかくなり
その方が優しく微笑めば、誰もが嬉しくなる。
全てのものがあたたかく包み込まれる安心感。

私は、これだけ長く生きてきて
あのような不思議な魅力を持つ女性に未だ出逢ったことはありませんでした。

～事も無く生き来しものを老いなみにかかる恋にも我は遇へるかも～

しかしながら、そのお方の目には意中のお方、貴方様しか映ってはおられませんでした。
相手が旅人様なら、私も仕方がありませぬ。

～暇無く人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも～ 」

旅人 「そうであったのか。」

百代 「ええ、そうですとも。あんなにも素晴らしき舞、そして素晴らしき女性に、
私はこれまで出逢ったことはありません。」

旅人 「ああ、そうじゃ、実に素晴らしい舞であった。
不思議な娘子だ。兎島．．．．．

妻を亡くした私の慟哭を、そなたはそばで見ておったな。
病というものは、私から妻を奪い、息子から母を奪っていった。
どんなに寂しく虚しい日々であるか、
あれは経験したものでないとわからぬ。
わしも息子も、ひたすら暗い闇のなかを彷徨った。
女性が照らす明かりが、こんなにも偉大であったとは。

だが今、こうしてわしはここにおる。

立ち直れたのは、娘子兎島のお陰であった。
気付くといつも兎島は側におった。
こんなにも歳の離れたこの老人に、
好意を寄せることなどあろうはずもない。私は疑った。
若さゆえの拙い同情か、
それとも、この老人でも何か利用できるものでもあろうのか。
ここまで墮落したこの身、騙せるものならいっそ騙されてみよう、私は思った。
しかし違った。
兎島は、ただ純粋に私を支えてくれたのだ。
私だけでなく、息子にもまた深い愛情を与えてくれた。

いつだったか、礼をしたいと申し出た私に
ただひとつ、答えたのが
「歌を、教えてはいただけませんか」と・・・・・・
ゆかしき娘子であった。
まさか、こんなにも早い別れが来ようものとは。
兎島の為に私は何もできぬまま。自分が情けなくて仕方がない。
いっそ恨んでくれたら良いものを。」

百代 「恨むなど・・・・。あのお方に限ってそのようなことを。
いつぞやの宴のあと、
旅人様が酔い潰れてしまった晩、
甲斐甲斐しくお世話をされる兎島殿に、問うたことがございます。
なぜこんなにもお尽くしになるのか、と。

兎島殿は優しく首を振り、こうおっしゃいました。

尽くしてなどおりませぬ。
心尽くされているのは、むしろ私の方だと。

こうもおっしゃいました。

この地で私は、
自分の身の振りもわからず、周りの気にも溶け込めず、
まるで空を彷徨っておりました。
生まれて初めてなのです。
あのようなお方に begegnete のは。
率直で、嘘がなく、何も飾らぬありのままのお方。
旅人さまが、ひとたびお話になられたのなら、もっとお聴きしたいと思い
寂しい顔をされたのなら、どうにかして元気をさしあげたいと思い
少し笑われたのなら、もっと楽しくしてさしあげたいと思えるのです。
ご縁とは何と不思議なものなのでしょう。

今はただ、
お側にいられるだけで幸せでございます。
できることならば、いつまでもお側で見守らせていただきたいのです。
叶わぬ夢ではございましょうけれども、
今の私の願いでございます。

．．．．．児島殿とは、そういうお方なのです」

百代の語りに、静かに耳を傾けていた旅人。

想い断ち切るべく、顔を向けた水城の向こうに、
たおやかに控えめな袖の振りが見えた。

児島であった。

<中入り> 「児島 振る袖の舞」

～凡ならばかまかも為むを恐みと振り痛き袖を忍びてあるかも～

～倭道は雲隠りたり然れどもわが振る袖を無礼と思ふな～

旅人「そなたのお陰で私がどんなにか心癒され勇気づけられたことか。
今この別れの瞬間であっても、寂しさは尽きぬ。
尽きぬどころか、涙溢れてどうすることもできぬ。
誰に気兼ねをするものか、その袖を振ってくれよう。
児島よ、どんなに離れ難きことか、
こんなにも辛い別れがあらうものか」

～丈夫と思へるわれや水荳の水城の上に涙拭わぬ～

～倭道の吉備児島を過ぎて行かば筑紫の児島思ほえむかも～

雪が振り始めた。

旅人と兎島、初めて出逢った宴の晩に舞い散った、白梅の花びらのように。
散らつく雪が、兎島の姿を優しく包み、遠く消してゆく。

～残りたる雪に混じれる梅の花早くな散りそ雪は消ぬとも～

～わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

～梅の花散らくは何処しかすがにこの城の山に雪は降りつつ～

旅人と百代。

いつかの梅花の宴で詠んだ歌を思い出し、
二人顔を見合わせ、寂しくも笑いあった。

<歌一覧>

『神亀五年戊辰。大宰の帥大友卿の故人を思恋（しの）へる歌三首』

●愛しき人の纏きてし敷栲のわが手枕を纏く人あらめや

愛しいあの人の枕としたわが手枕を、ふたたびする人はもういない

(巻3・438)

●還るべく時は成りけり京師にて誰が手本をかわが枕かむ

いよいよ還るべき時になったことだ。しかし都で一体誰の腕を私は枕としよう

(巻3・439)

●京なる荒れたる家にひとり寝ば旅に益りて苦しかるべし

妻もなく荒涼とした都の家に寝たら、苦しいはずの旅以上に心和まぬ事だろう

(巻3・440)

『大宰の大藍大伴宿禰百代の梅の歌一首』

●ぬばたまのその夜の梅をた忘れて折らずに来にけり思ひしものを

ぬばたまの夜に咲いていたあの梅の花を、すっかり忘れて手折らないで来てしまった。

かねて、想っていたものを。

(巻3・392)

『大宰大藍大伴宿禰百代の恋の歌四首より』

●事も無く生き来しものを老なみにかかる恋にもわれは遇へるかも

無事に今まで生きてきたものを、老境に入って私はこんな恋に出逢ったことよ。

(巻4・559)

●暇無く人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも

人の眉をしじゅう搔かせて、逢える期待を持たせながら、恋しく逢えないあの子よ。

※ ↑ 恋人に逢える前兆という俗信があった。

(巻4・562)

冬十二月、大宰帥大伴卿の京に上りし時に、娘子の作れる歌二首

●凡ならばかほか為むを恐みと振り痛き袖を忍びてあるかも

通りいっぺんの想いならば、袖を振るなり何なりどのようにもしましょうものを、

恐れ多いことと、切に降りたい袖も我慢しておりますよ。

(巻6・965)

●倭道は雲隠りたり然れどもわが振る袖を無礼しと思ふな

大和道は雲の彼方です。雲隠れてお目にふれずとも、どうか私の降る袖を無礼と

お思いただきますな。

(巻6・966)

右は、大宰帥大伴卿の大納言に兼任して、京に向かひて上道す。此の日馬を水城に駐めて府家を顧み望む。時に卿を送る府吏の中に、遊行女婦あり。その字を児島といふ。ここに娘子、此の別るることの易きを痛み、彼の会ふことの難きを嘆き、涙を拭ひて、みづから袖を振る歌を吟へり。

大納言大伴卿の和へたる歌二首

●倭道の吉備の児島を過ぎて行かば筑紫の児島思ほへむかも

倭への道に吉備の児島を通っていくと、筑紫の児島のことと思われるだろうなあ。

(巻6・967)

●丈夫と思へるわれや水茎の水城の上に涙拭はむ

立派な男子だと思う私は、水茎の水城の上で涙を拭こうか。

(巻6・968)

『後に追ひて梅の歌に和へたる歌四首』

●残りたる雪にまじれる梅の花早くな散りそ雪は消ぬとも

残雪に混じって咲く梅の花よ、早々とは散るな、雪は消えてしまおうとも。

(巻5・849) 作者は大伴旅人か。

『梅花の歌三十二首より～』

●わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

わが庭に梅の花が散る。天涯の果てから雪が流れ来るよ。

(巻5・822) 主人 大伴旅人

●梅の花散らくは何処しかすがにこの城の山に雪は降りつつ

落梅はいずこのこと。それにしてもこの城の山には雪の降り続くことよ。

(巻5・823) 大藍伴氏百代

今回は夢幻能でなく、時間を共に過ごす現在能で創作しました。
前作品で、彷徨える魂としか存在しなかった兎島を、
生身の人として感じたかったからです。
娘子兎島は、私にとって大変魅力を感じる女性像で、
兎島の存在なくして、創作能への熱は生まれなかったと言っても過言ではありません。
しかしながら、出逢いは良くないものでした。

万葉集の勉強を始めた頃の私は、
大伴旅人の情にあふれ、豪快でおおらかな人物像に惹かれ、
旅人の歌をたくさん読み進めました。そして旅人が最愛の妻を亡くした際の歌に出会います。
その心情を隠す事を美とせず、悲しみをありのままに表現する姿に一層惹かれていきました。
ところがです。
その先に、旅人と娘子兎島の相聞に出会ってしまいます。
「旅人の奥さんへの一途な想いとは？まさかの遊女と。」
私は、旅人と兎島に嫌悪を抱きました。
ところが、
奈良の都へ戻るため、海路を渡る旅人の息子、家持少年へ送った兎島の歌を見つけ、
その気持ちが一扫されます。

～家思うと心進むな風守りよくしていませ荒らしその路～

(家郷が恋しいとて心を流行らせてはいけません。

風の具合をよく伺っていらしてください。荒々しいことです。その路は。)

家持を自分の子のように心配しつつも、寂しさを隠し、しっかりと路を見据えさせ旅立たせる、
この歌に真の兎島の姿、誠の母性を感じたからです。
そしてもう一度、旅人と兎島、相聞をもう一度読み返しました。
すると、自分の想いをひた隠し、奥ゆかしく別れを告げる兎島の姿が目の前に現れ、
彼女の悲しみを共有し、その想いを何とか救いたいと思うようになったのです。
そして、頭の中で能舞台を作り上げ、なんとか私なりに兎島の想いを昇華させることが
できました。

今回の物語には、前回の創作狂言『酒を讃むる歌』に続いて、大伴百代が登場します。
珍しい名前が自分と同じだからでしょうか、
私は百代が、自分の分身のような気がして、気がかりを彼に解決してもらおうべく
いろいろと動いてもらっています。

劇中に出てくる歌、

旅人の『わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも』と
百代の『梅の散らくは何処しかすがにこの城の山に雪は降りつつ』は、
梅花の宴の席で歌われたものですが、何処にこの歌の面白さがあるのか、
この歌の二人のやりとりの妙が、当初私にはまったく理解ができませんでした。
けれども物語上で、周囲の人に気を配る心の優しい百代を描くうちに、
この歌の真意が自分なりに見つかったのです。

そもそもの梅花の宴は、今まさに咲き誇る満開の梅の花を前にした賑やかな宴です。

『正月立ち春の来たらばかくしこそ梅を招きつつ楽しきを経め』大貳紀卿
『梅の花今咲ける如散り過ぎず我が家の園にありこそぬかも』少貳小野大夫
『梅の花咲きたる園の青柳は蔓にすべくん成りにけらずや』少貳粟田大夫

華やかに詠まれる歌とともに宴ものびやかに進みます。

ところが、

山上憶良が妻を亡くした友人の旅人を思うあまり、亡妻思慕ととれる歌

『春さればまづ咲く宿の梅の花独り見つつや春日暮らさむ』

を詠った為か、主人の旅人は亡くなった妻を思い出し、

またも悲しく「散る梅」を詠います。

それに対して、「落梅なんていすこですか？」と切り返し、

しんみりと盛り下がる場の空気を明るくし、旅人を元気付けようと試みる百代に、

さりげない優しさとユーモアのある人間味を感じ、とても頼もしく嬉しくなりました。

旅人を水城で見送ったのち、大宰府へ戻った百代は、兎島ときっと出逢えたはず……

その優しさで、傷心の兎島を元気付けてくれるに違いありません。

私の願いと祈りを、しっかり百代に託しました。



